

京大ブータン友好プログラム第17 隊渡航報告と ブータン伝統医療の考察

加藤恵美子

京都大学大学院医学研究科 人間生態学（フィールド医学）

はじめに

2017年10月に現国王の妹君であるソナム・デチェン・ワンチュク王女が来日されたことへの返礼として、ブータン友好プログラム第17次訪問団は2018年11月19日から24日までブータンへ訪問した。第17隊のプロジェクトの一つである、京都大学とブータン王国の60年の交流を綴ったアーカイブ本の作成を、筆者と、同期の竜野真維氏（京都大学大学院医学研究科）が担当した。我々は、本の編集経験はなく、すべてが手探りであったにも関わらず、多くの方々の協力を得て、ブータンアーカイブ本「Memories of a Sacred Kingdom」を完成させることができた。今回のブータンへの訪問は筆者にとって5回目であったが、以前と目的と内容は大きく違うものとなった。山極壽一教授（京都大学総長）、松沢哲郎特別教授（京都大学高等研究院）と一緒であり、ブータン王族の方々との交流の機会がもたらされ、第4代国王との謁見が予定されていたのだ。また、ブータン首相に表敬訪問した際に、医師であるDr. Lotay首相の「医師としての信念」に感銘を受けた筆者は、ブータン伝統医療に興味を持った。今回のブータン渡航についての報告と、ブータンにおける伝統医学の役割について、若干の文献的考察も加えて報告する。

ブータンアーカイブ作成

今回のブータン渡航について坂本龍太准教授（京都大学東南アジア地域研究研究所）から打診があったのは、2018年6月のことであった。初回の打ち合わせで、京都大学とブータン王国との60年交流史をまとめたアーカイブを同期の竜野さんと作成してほしいと松沢教授からご依頼をうけた。二人とも本の編集経験はなく、また京大とブータンの関係について一から勉強する必要があ

り、本当に作り上げることができるのか、先の見えない不安からの出発であった。

まず、我々は関連の先生方に写真の提供をお願いし、素材を集め、提供された写真の整理から始め、同時に印刷会社の手配、見積りでの作成、納品までの工程表作成などを進めていった。アーカイブ本のアウトラインが出来上がったところで、写真のレイアウトや説明文の編集作業を開始し、筆者は「京都大学ブータン友好プログラム」と「1969年京都大学ブータン学術調査隊」の章を担当した。京都大学ブータン友好プログラムのホームページには、第1次訪問団から第16次訪問団までの記録が残されており、これらを参考に編集を進めていった。特に、第14次訪問団の「京都大学ブータン遠征隊ラヤ・ガサトレッキング」の編集には苦勞を要した。筆者は大学山岳部出身であるが、日本国内の登山経験しかなく、世界の山と言えは真っ先に頭に浮かんでくるのは「チョモランマ」「K2」くらいで、山の知識はほぼないといっている。そのため、ホームページの文章の記録だけではイメージがつかめず、ブータン登山地図とにらめっこしながら、中継ポイントをトレースし、ラヤ・ガサトレッキングコースの全体像をつかんでいった。登山地図ごとに、表記されている名称が統一されておらず、何が正しい表記なのか多数の媒体を使って確認しながらの地道な作業であった。しかし、この作業によって筆者が学生時代に日本北アルプスの表銀座を縦走した思い出が蘇ってきた。ラッセルで腰を壊してしまっただ後輩のこと、滑落停止訓練で全く停止できず何メートルも傾斜を滑ったこと、今となっては苦笑いしてしまう懐かしい過去の経験ばかりである。

「1969年京都大学ブータン学術調査隊」の章については、松林公蔵名誉教授（京都大学東南アジ

ア地域研究研究所）が以前編集した写真集や過去の新聞記事、帰国報告書、ホームページなどを参考にし、目的や経緯をまとめ、編集していった。この内容は、1969年という約50年前のブータンの記録であり、今後貴重な資料になることは明白なため、可能なかぎり多くの写真、情報を載せるよう努力した。また、筆者にとっても写真に写る風景は、実際に訪れた場所ばかりであり、特に、昨年滞在していたMongar県中心部の風景は、現在の街並みを想像できないほど、草木が生い茂る素朴な農村であった。ここから、50年の間に多くの歴史と人々の思いが交錯し、今の姿に発展を遂げてきたのかと、一枚の写真から想像が膨らんでいった。このアーカイブ本が完成した時、見る人それぞれのストーリーが想像力と共に展開されていくかと思うと、我々が作業しているアーカイブ本の編集はとても価値のあることだという自負に近い思いが込み上げてきた。筆者にとっては、地道な編集作業であったが、学内外の諸先生方からの写真の提供や文章の校正など多大なるご協力をいただき、ブータンアーカイブ本「Memories of a Sacred Kingdom」を完成させることができ、心より感謝しております。

Lotay Tshering首相表敬訪問

2018年11月7日に新しく首相になったばかりのLotay Tshering氏へ表敬訪問させていただいた。筆者は2013年10月から2014年3月までの約半年間、ジグメ・ドルジ・ワンチュク国立病院（JDWNRH）にてDr. Lotayと一緒に仕事をした経験がある。その当時、彼は2013年の選挙で落選した後で、ボランティアの泌尿器科医として診療をしており、よくブータンの医療の現状を熱く語ってくれた。一方で、手術の合間には、控室でスタッフと冗談を言い合うお茶目で、ユーモアにあふれる一面も持ち合わせていた。彼は、手術が非常に素早く、的確で、泌尿器科分野だけでなく、腹腔鏡下胆のう摘出や、腹腔鏡下卵管結紮術などもこなしてしまう。当時、共にブータンに滞在していた岡島英明准教授（京都大学病院小児外科）も彼の手術手技に感心していたほどだ。また、彼は患者からの信頼も厚く、手術キャンプと一緒に同行したときには、Dr. Lotayの診察を求めて、カ

ルテを片手に地域の住民が行列を作っていたほどだ。彼は、手術の合間にできる限られた時間でさえも、一人一人の患者を診察している姿が印象的であった。

表敬訪問当日、Dr. Lotayは首相の証であるオレンジ色のカムニを纏い現れ、以前筆者が感じていた印象と変わらず、ハツラツとしていた。首相就任の祝意を示す、白いスカーフ（カター）をブータンの礼儀にそってお渡しした際、筆者のことを覚えてくれていたようで、「以前と変わらずお元気ですか?」と声をかけてくださった。京都大学とブータンとの関係・協力について、首相と山極総長、松沢教授の多彩な会話が繰り広げられ、その際の首相の言葉に筆者は感銘を受けた。「治療というのは、diseaseを治すことは50%でしかない。患者のBackgroundや、Spirituality、Happinessも同時に向き合うことが残りの50%である」首相が現役医師時代に、まさしく有言実行していた内容であった。特にブータンは日本よりも医師の数が不足しており、目の前の治療に忙殺されがちになるが、常に大局観に立ち、強い信念を体現していた。筆者がフィールド医学の大学院に入った当初の目的は、病気を科学的視点だけでなく、環境・宗教・意識などさまざまな分野の視点とそれらの関連を研究することであった。首相との面会は、筆者にとっての原点を強く思い出させてくれるとても貴重なものになった。

王妃、王女との晩餐

首相との面会のあと、ソナム王女の母君であるドルジ・ワンモ・ワンチュク第四代王妃の宮殿での晩餐会に招待していただいた。晩餐会など全く経験のない私は、宮殿に向かうバスの中で好奇心と緊張が混ざったような感情を抱いていた。王族の宮殿敷地にはいると、バスの中の電気を消して、静かに奥へと進んでいった。敷地は予想より広大で、入口の門からさらに20分ほど走り続けて、王妃宮殿に到着した。宮殿の外観はブータンの歴史的な建築様式であり、対照的に宮殿内は現代風の美しい絵画や置物で飾られていた。食事が始まる前に、ソナム王女は隅っこに目立たないように座っている我々の元へ歩み寄り、お話をしてくださった。筆者が5年前にJDWNRHで産婦人科診



写真1 建設中の法学校にてバターランプの奉納



写真2 Druk Wangyel Monastery にて



写真3 Khamsum Yulley Namgyal Choeten の菩提樹にて



写真4 Lotay Tshering 首相への表敬訪問

療をしていたこととお話すると、「Health はもっとも大切です。GNHを進めていくには、まずHealthが満たされる必要がありますからね」と笑顔でおっしゃっていた。間近に王女とお話する機会は初めてだったので、本当にお美しいと同性ながら見とれてしまった。食事は、まさしく「晩餐会」という豪華な奥の広間で準備されていた。王妃、王女が豊富な知識とユーモアで我々を惹きつけ、堅苦しさを感じさせない、とても楽しい晩餐会となった。

伝統医療、チベット医学への興味

首相の「Diseaseの治療は50%」の言葉が印象に残っていた筆者は、訪問の最終日に、他国とは違うブータン独自の医療とは一体何かを漠然と考えながら、ティンブーの町を散歩していた。筆者は2013年からJDWNRH、Mongar 東部地域中核病院 (ERRH) での産婦人科診療、Chaskhar BHUでのプライマリーケア診療の経験がある。これらの経験を通して考えると、ブータン独自の医療において、切り離すことができないものとは、やはり伝統医学の存在である。ブータンでは、伝統医

学を重んじており、病院にも西洋医学の医師と伝統医学の医師が常駐している。患者は自分の判断で、西洋医療の診察をうけるか、伝統医学の診察を受けるかを選択することができる。筆者は、5年前ブータンに滞在しているときから、ブータンでの西洋医学と伝統医学のすみ分けと共存について興味を持っていたが、診療にかまけてしまい、興味を深めることはできなかった。最終日の散歩で、ブータン独自の医療を知るため、本屋で購入したのが、「Tibetan Medicine」³⁾という本であった。ブータン伝統医学には興味があるものの、この基礎となっているチベット医学について何も知らないことに気付き、帰国するまでの時間を使って、購入した本を読んだ。以下、チベット医学の概要とブータンにおける伝統医学の役割について若干の考察をしたい。

チベット医学

チベット医学は中国医学、アーユルヴェーダ（インド伝統医学）、ユナニ医学（イスラム伝統医学）とともに東洋四大医学に数えられている。チベット医学は、チベット仏教に根ざした精神医学であり、8世紀に医聖ユトク・ユンテン・ゴンポによって編纂された『四部医典』を经典としている。脈診・尿診が発達しており、生薬をもちいて治療を行い、その生薬は「アムチ」と呼ばれるチベット医がみずからヒマラヤ山中にわけいって採取してくる¹⁾。特にブータンは、メンジョン（薬草の国）と呼ばれるほど薬草が豊富で、薬を作る際の自給率もほぼ100%と言われている²⁾。チベット医学では、人の体質をティスバ（mkhris pa）、ルン（rlung）、バトカン（bad kan）と3つに分類し、基本的に病はこの3つのバランスが崩れることによって起こるとみなされる（3体液理論）⁴⁾。そのため、治療もこれらのバランスを保つための、食生活、生活習慣、外的治療、薬方（四大治療法）を行う。また、チベット仏教に基づくあるべき心の状態に戻し、精神をいかに安定させるかも治療の一環で行う。チベット医学では超自然的病因が同時にあるとされ、悪霊について脈診上の判定法は『四部医典』に明記されている。この場合、祈祷や除霊などの宗教儀式が必要とされ、患者の脈に悪霊の影響が認められなくなってから初めて、アムチによる治療の効力を発揮できるとされている。

アムチによる診断は、問診、望診（尿や便などの検査）、触診（脈診）、の3方法が重要とされ、そこに星占術を加えて診断していく。特に、脈診はチベット医学では一般的でかつ、重視される診断方法とされ、患者は、正確な脈診を受けるため、脈拍を乱す食物の影響を避けるために、2-3日の食事制限をしてからアムチの診察を受けることもある。

伝統医学の役割とは

西洋医学はエビデンスに基づいて展開している。西洋医学で使用される薬剤や治療法には必ずエビデンスがあり、だからこそ広く受け入れられ、世界的に受容されている。一方、チベット医学は、仏教をベースに精神と肉体は強く繋がったものとしてとらえ、病因の一つに精神（仏教としてあるべき態度）が関連していると考えられおり、また処方される薬草の治療効果について科学的根拠は示されていない。日本人で初めて、ダラムサラにある医学学校（メツィカン）を卒業しチベット医になった小川康氏の著書の一説では「内臓においてならともかく、眼に関しては技術、知識のどちらをとっても、現代医学がチベット医学から得るものは全くないと断言できる」¹⁾と述べている。しかし、チベット医学（伝統医学）を科学的ではないと、否定することは簡単であるが、それでもブータンが国として伝統医学を大切にしてきたことには、何か意味があるはずである。科学の視点のみから考えれば、ブータン伝統医学は治療効果が証明されておらず、非合理的であり否定されるべきものとなる。しかしながら、科学では担うことのできない「何か」を伝統医学は担っているのではないだろうか。ブータンにおいて、その「何か」を否定してしまうと、国の根幹を築くアイデンティティーが欠落してしまうのではないだろうか。『人間の合理性には限界がある、と認める「複雑系」の立場では、ある程度の「不純物」こそがシステムの安定化にとって不可欠であるとする』と複雑系の研究者である、アッシュビーは述べている⁶⁾。この考え方からすると、合理性のみを追求した先にあるものとは、先進国で問題となっている、「物質的には満たされているが、心が満たされていない」という現在の姿であると言えるかもしれない。だからこそ、ブータンは合理性至上

主義から一歩引き、諸外国と異なる発展を目指しているのだと感じた。今後、伝統医学と西洋医学の接点だけでなく、GNHに代表されるブータンの政策の具体性と発展について、さらに考察を深めていきたい。

謝辞

今回のブータン渡航において、多大なるご支援・ご指導をいただきました山極壽一教授（京都大学総長）、松沢哲郎特別教授（京都大学高等研究院）、西谷祐子教授（京都大学法学研究科）、坂本龍太准教授（京都大学東南アジア地域研究研究所）、松井一純事務部長（京都大学高等研究院）、松永倫紀事務掛長（京都大学高等研究院）、竜野真維氏（京都大学大学院医学研究科）に感謝申し上げます。また、ブータンアーカイブ作成にあたり、お忙しい中ご協力いただきました松林公藏名誉教授（京都大学東南アジア地域研究研究所）をはじめ、諸先生方、すべての方々に心より感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 小川康 僕は日本でたったひとりのチベット医になった ヒマラヤの薬草が教えてくれたこと 径書房 2014
- 2) 風の旅行社 ホームページ www.kaze-travel.co.jp/tibet_ogawa070.html (2018.11.27 現在)
- 3) Ralph Quinlan Forde The book of Tibetan Medicine 2009
- 4) 山田孝子 ラダック～西チベットにおける病いと治療の民族誌～ 京都大学学術出版会 2009
- 5) 安井真奈美 ブータンの出産習俗：出産観の理解にむけて ヒマラヤ学誌 2000, 7:61-78
- 6) 複雑系の事典編集委員会 複雑系の事典—適応複雑系のキーワード— 朝倉書店 2001

Summary

The Report on 17th mission of Kyoto University and the Bhutan Friendship Program and the Consideration of Traditional Medicine in Bhutan

Emiko Kato

Department of Field Medicine,
Kyoto University Graduate School of Medicine

The author visited Kingdom of Bhutan on November 19 to 24, 2018 as 17th mission of Kyoto University and Bhutan friendship program member. The author made a courtesy call on the Prime Minister of Bhutan and was impressed by his words. Bhutan traditional medicine is based on Tibetan medicine. The author outlined Tibetan medicine and consider the role of traditional medicine among Bhutanese.